
妄想ウサギSIDE

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想ウサギSIDE

【Nコード】

N0180Z

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

脳内ストックされたまま、途中まで書いて放置、そんなジャンル諸々なお話の数々。

連載にするつもり（だった？）ネタ置き場的タイトル。

続くかもしれないし続かないかもしれないしわからないものばかりなので、続きはあまり期待出来ません。

超不定期投稿。

少年ウサギ・そのいち

僕はウサギ。

耳がついてて尻尾が丸くて白いやつじゃない。

名前がウサギなだけで、生物学上は人間の男だ。

名前の割りには整った顔とさらさらの黒髪だったりする。

僕は喧嘩が嫌いだけれど、何故かいつもふっかけられる。

何故だろうかと何度も考えてみたけれど、そのところはいまいちわからない。

そうこう考えているうちに、やつぱりまた、ふっかけられた。

「おい田中、お前いけすかねえんだよ。」

「どうして？」

「ウサギとかいう名前のくせして、眼鏡なんか掛けやがって！」

「目が悪いからね。ああ、君も掛けたいのかな？けど、眼鏡掛けたからって誰でも賢くて美しくなれるわけじゃないんだよ、郷山田くん。」

ああ、郷山田くんが憤慨してしまった。
的を射た的確な発言をただけなのに。

「ふざけんな！」

ひらり。

突進してきた彼を華麗に避けて、僕は胸ポケットから赤いハンカチを取り出す。

喧嘩は嫌いだ。

だから僕は、決して闘わない。

避けて避けて避けまくる。

闘牛士の如く、赤いハンカチをひらひらとさせながら。

「君はがさつだなあ。美しくないよ。ああ今のは見た目のことじゃないからね。」

「う、うるせえ！ハンカチなんかで闘いやがって！だからいけすかねえんだよ！」

「どうしてわからないのかな。」

ひらり。

赤い色に興奮気味の彼を挑発し、僕はまた華麗に避けて見せる。

ああ虚しい。

お師匠様は、こんなことのために僕にハンカチ技を教えたわけではないというのに。

切なさに胸を締め付けられる思いで、今日も僕は、ハンカチと共に舞う。

少年ウサギ・そのに

世の中は常に騒がしい。

いつも通りアイロン掛けしたハンカチを胸ポケットにしまつて、一歩うちを出た途端、そんなことを思った。

「お前の美形面に腹が立つんじゃ！」

「立つんじゃ！って言われても…って、イタツ。」

斜め向かいの玄関先で、ニコチン中毒女：基い、ヒナコさんが、既に何人がさえわかりかねる美形、ルビーさんを足蹴にしていた。

「イタツとか可愛い子ぶってんな！男の癖に！男で美形で外人さんか！？え、このやる！」

「痛いよヒナコさん…男で美形で外人って俺の所為じゃないし…。」

最もな台詞を吐いたルビーさんに、心中密かに頷いて同情した。

けれど、”渡辺ヒナコ”は大和民族まるわかりな名前だとしても”

車谷ルビー”ではそう言われても仕方ない気がしなくもない。

そう言う僕も”田中ウサギ”だからか、ヒナコさんには目を付けられている。

至極、迷惑極まりない話だ。

「…早々に立ち去ろう。」

小さく呟いて、しかし、学校へ行くためには通らざるを得ないそこを足早に見てみぬ振りでやり過ごそうとした。

が。

「天誅、ハンカチ少年！」

あられもない台詞と共に、ドロップキックが跳んできた。ひらりと躲し、颯爽とハンカチを取り出す。

「ヒナコさんも懲りないですね。」

「何をう！？やるか、ハンカチ！」

「望むところです。」

「え、ヒナコさん、俺は？」

「黙っとけ美形！」

「いつも思っけど…ヒナコさんのそれ、誉めてるの？」

がつつと小気味よい音がして、ヒナコさんの踵落としがルビーさんに綺麗に決まった。

「いざ、尋常に勝負！」

地を蹴るヒナコさん。

揺らめくは、くわえ煙草の煙とハンカチ。

そんな僕の、いつもの朝。

少年ウサギ・そのさん

僕のハンカチーフが盗まれた。

大変困ったことだが、困ったことはこれだけでなく。

「…あの人だな。」

犯人の目星がいても容易く付いてしまうことだった。

面倒だとは思えど、あれは代々田中家に伝わり祖父から受け継いだ由緒正しき赤いハンカチーフ。

このままにしておく訳にはいかないし、このままにしておいたとしても、どうせあの方はドアを蹴倒し、喚き散らしながらうちにやって来るだろう。

「何て面倒くさい人なんだ。」

そう呟いてから、僕は溜め息混じりに斜め向かいのあの方の家へと足を運んだ。

「あれーどうしたのさハンカチ少年。」

控えめにノックをしてドアを開ければ、くわえ煙草で面倒くさい人

ヒナコさんが、やる気なくソファにだらけながらそう言った。

「相変わらずニコチン中毒ですね。」

「お前は人んち来て第一声がそれか。」

最もなコメントは敢えてスルーする。

「あれを返してくださいませんか。」

「あれ？どれ？」

「そんなすつとぼけたボケはいりません。」

「ボケてねえよ！あたしはまだまだピツチピチだ！」

毎度のことながら、どうも話が噛み合わない。

ヒナコさんの脳細胞は、果たしてちゃんと機能しているのだろうか。余計なお世話かもしれないが、生活費はどこから出しているのだろうか。

そう言えば、ヒナコさんは働いているのだろうか。

「あんた、一体何しにきたってのよ。」

だらだらしながらだらだら話すヒナコさんを一瞥して、こんなどうしようもない人間を雇うお人好しがこの世にいるのだろうか、どうでもいいことを考えてしまった。

「あの、生活費は一体どこから…」

思わず口から思考が漏れたとき。

「あ、ウーちゃんじゃないかー。どうしたの？」

「ウーちゃんはやめてください。ていうか、またいたんですかルビーさん。」

ヒナコさんのパシリとしての人生に疑問を持っていないだろうルビーさんが、キッチンからひょいと現れた。

「ウーちゃんも食べる？今日のお昼はチャーハンだよー。」

「チャーハンはどうでも…あ。」

「あ？」

フリフリのエプロンを身に付けたやたらと美形な彼が布巾代わりに

手を拭いているそれ。

真っ赤で高貴さを漂わすそれは。

「…貴方でしたか。」

「チャーハンは？」

「…いただきます。」

僕のハンカチで手を拭く満面笑顔のルビーさんに、それ以上は、何も言うことが出来なかった。

「あんだ昼飯たかりに来たのかよ。」

「結果的にそうなったまですが。」

後日。

ルビーさん宅の物干しにはためくそれを、そっと取りに行ったことは言うまでもない。

「ルビーさんには…言えないな。」

彼の憂うべく人生とこれからを考えながら、只、遠い目でそう呟いた。

ピリカニズム 単位は“柱”です

「今日もいい天気だ。」

煎れたての緑茶片手に、うーんと伸びをして、澄んだ青空に目を細めた。

うんうん、とても清々しく素敵な朝だと思う。

大満足。

ちーちゃん（彼女）は今頃、ラクダに跨がって悠々と出勤中なんだろうなあとか、これまた清々しく、頬を緩めて考えてたりした。

僕はピリカ・ココ・町村。

オレンジの髪にグレーの瞳をしていて、自分でも正直、何人なのかは既にわからない。

町外れのこの村で、占い師をやっていたりする。

最近の僕の興味は、お隣に住んでる眼鏡少年と、斜め向かいのニコチン中毒な彼女と、そのお隣の少しMっ気があると思われる美形な彼だ。

「ヒナコさーん。」

朝っぱらから堂々とニコチン中毒な彼女、渡辺ヒナコさん宅に了承なく乗り込んでいくMな彼、車谷ルビーくんの姿が見えた。

ああ、毎度のこととは言え、僕はわくわく…いや、はらはらしてしまっ。

「ルビーてめ！あたしはまだ寝てたんだよ！」
「イタッ！…酷いよ、ヒナコさん…。」

外にまで響き渡るガシャーンという音と、打たれ強いのかあんまりこたえてなさそうなルビーくんのちよつと気の抜けた声。

「今日も平和だなあ。」

呟いて緑茶を見れば、茶柱が立っていた。

「柱って、神様を数える単位だね。」

てことは、僕の緑茶に一柱。
神様が降りたってことで。

「いいことあるかなあ、ちーちゃん。」
「え、僕は田中ウサギですけど。」

ちょうど前を通り掛かったお隣さんに、怪訝な顔でそう言われてしまった。

忙しいんです。

大学事務つてのはまあ、意外や意外、忙しいものでして。休講のお知らせを出してみたり、警告書を発行してみたり、經理のお手伝いしてみたり、ときにはお茶出ししてみたり。

「あかりさん。」

ああ、忙しい忙しい。

「ねえ、あかりさんってば。」

忙しい忙しい、忙しいったらない。

「あかりさんってーばー、もう。」

「忙しいっつつてんじゃ！クソガキが！」

につこにつこと笑顔を浮かべ、ついでにキラキラエフェクトで眩しさを撒き散らす男に、罵声を投げつけてやった。

どうだ、参ったかこの野郎！

「忙しいつつつてんじゃ！つて…今、初めて聞いたけど？」

「モノローグで散々言っただよ！」

わかれよ、そのくらい！

わかって、わかってよ、お願いだから！

あたしは今、仕事中なんですよ？

お気楽極楽大学生に構ってやってる暇はないんですよ。

だってあたしは、社会人だから！

「そんな訳で、早く講義に戻りなさい。」

最もらしい理由で、スマートに追いつくあたし。

流石は社会人！

学生さんとは訳が違うってね！

「でも俺、今は空きなんだ！」

何ですと？

「ほら、”倫理学休講”ね？」

携帯を突き出して今日の休講予定をあたしに見せてくるこいつ。

あ、クソ、マジだ。

毎日毎日飽きもせず事務室に通ってくるこの男、顔がよければ頭もいい。

ついでに、体もよければ人当たりもいいっていうね。

久留米航太、二十二歳。

またの名を『イラつくほどの美人』。

…カッコいいとかじゃない、男前とかでもない。

男なのに『美人』なのだ。

神様、不公平じゃあないでしょうかね？

「だからさ、あかりさんもうすぐお昼でしょ？一緒に食べようよ。」

ね？と上目遣いでおねだり攻撃を仕掛けてくる。

ヤメロ！

マジで！

そのエフェクトは外せんのか！

「ああ、いいですよ真壁さん。久留米くんも待ってるみたいですし

ね。」

ああ事務長（男）！

何、エフェクトと顔にほだされてんですか！

「やったー！ありがとう、事務長さん。」

につこりと事務長に笑顔を向けた航太を見て、ほづ…と感嘆を漏らすその他大勢。

ちよつとちよつと！

あたしはこいつのせいで、仕事が進まないんだってば！

「いえ、遠慮し…ああああ、遠慮するつつってんじゃなかああああ…」

「行こう行こう、あかりさん。」

あたしの言葉は誰に聞き入れられることなく、半ば引き摺られるように、航太によって連れ出された。

この、クソガキヤー！

ああ、周りの同僚達の温い視線が痛い…。

「何食べたい？」

「何でも。」

「じゃあ、俺あかりさんを…」

「却下じゃバカたれが！」

「どうでもいいけど、あかりさんて言葉おかしいときあるよねー。」

…うるさいわ！

真壁あかり、二十六歳。
とある大学事務員です。

何故か毎日『美人』がやってきては、仕事を妨害していきます。

神様、人に二物以上をお与えになるのは、やめた方がいいと思います。

大事なんです。

カタカタとパソコン画面に向かうあたしの顔は、きっと、出来る女
そのものに違いない。

違いない！

そうに違いないわ！

「真壁くん、その…」

「何ですか。」

おそろおそろといった感じで話し掛けてきた事務長に振り向きもせ
ず、手も止めず、短く応える。

今いいとこなんです。

邪魔ならしないでくださいませんか。

「それはその…いいのかね？」

「何がですか。」

「何って、その、うーん…。」

言葉を濁す事務長の言いたいことはわかる。

わかるけども。

今しかない！

今しかないんですよ！

わかってくださいよ、事務長！

「大丈夫です、今日の仕事は終わってますから。」

「そ、そうかね。それはいいんだけどね、真壁くん……。」

事務長うるさいな。

そう思って振り向こうとした、

そのとき。

「でもねーあかりさん。それ、個人情報だよ。」

のしつと背中に感じた重みと体温。

華奢に見えても、やっぱり男なんだなあとかうっかり思わせるそれ。

出た！

予定より早い！

「……離れてくれないかね、久留米くん。」

「久留米くんなんて、やだなー。航太って呼んでくれていいのに。」

「呼ばんわ！はーなーれーろー！」

事務長そっちのけでぎゃあぎゃああと藻掻くあたし。

久留米航太の腕はあたしの肩に回されたまま、それでも離れることはなかった。

「何でいるのさ！？今はまだ講義中な筈でしょうが！」

自由のきく右手で、ずばっとパソコン画面を指した。

そう。

あたしはこいつのしつっこいベタつきとお誘いから逃れるために、こいつのスケジュール一覧を作成してるところだったのだ。

「言っとくけど！データベースに侵入した訳でも、あんたの手帳盗んだ訳でもないかね！」

尾行という正規の手段により手に入れた情報なんだから！
文句は言わせねえ！

「あ、そうか…なら、いいんだけどね。」

そんなことを漏らしてから事務長がほっとしてたけど。

今はそれどころじゃない。

腕を剥がすのに躍起になっていれば、むかつくほどに綺麗な笑顔で、むかつくほどに綺麗な指が、

ぱちつと、

パソコンの電源を、切った。

切った…

……切った？

「なああああつ！！！？？？」

「今の講義ね、小テスト終わったらあがりだったんだよね。」

「聞いてねえよ！」

そんなことは聞いてない！

あんた今、あんた今、何しやがったんだー！！！！！！

「さっき聞いたじゃん。」

「ああああ…あたしの、あたしの努力の結晶が…」

がつくりとうなだれたあたしの耳元で、むかつく美人が、甘く甘く囁きを零した。

「…そんなに俺のこと束縛したいの？」

ああ、神様。

「あ、あかりさんもう仕事終わったんでしょ？ご飯でも食べに行こう。」

どうしてこんな。

「それからさ、あかりさんのこと食べてー…」

「いい訳あるかー！！！！！！！！」

アップパーカットを繰り出すも、難なくそれは躲かれて。

「さあ行こう！すぐ行こう！」

「やだああああ！」

またもや引きずられるように荷物ごと抱えられたあたしが、奴から逃げ切れたのは。

結局、ご飯を食べた後だった。

「可愛いなー、あかりさんってば。」

走って逃げたあたしは、奴がそう言うてくすくす笑っていたことなんて、もちろん知らない。

喜んだんです。

さてさて。

大学はもうすぐ夏期休暇、いわゆる夏休みに入る訳で。

「嬉しい！嬉しい！ちょお嬉しいです事務長！」

「そ、そうかね。」

若干引き気味の事務長相手に、あたしは、ガッツポーズでそう宣っていた。

そうは言っても。

あたし達は二ヶ月近く丸々休みがある訳じゃない。

後期からの講義申請やその他に備えて、それなりに仕事はあったりする。

あ、講堂の掃除の手配しとかなきゃな。

夏期の資格講座のスケジュールも作っておかないと。

ある意味、いろいろなことに追い込み作業はあるものの、それでも緩む口元は隠せなかった。
何故ならば。

「あっかりさん。」

ばたーんつと事務室のドアを勢いよく開けて乗り込んできた美人が、あたしの元へと、一直線に駆けてくる。

だって、

だって、

夏休みとなれば。

「こいつがいないんですよ、事務長！」

「ああ、そういうこと。」

聞いてもない事務長に笑顔満面でそう言えば、納得したのか、事務長は苦笑でそう返した。

「何の話？」

「うふふふ。」

「気持ち悪いよ、あかりさん。」

うっさいわ！

何とでも言っがよろしい！

今日のあたしは挫けない！

強い子元気な真壁あかりですから！

「強い子元気って。」

「モノローグ読まれたって平気だもんね！」

「それ、グリコだよね？」

「ちょっと聞いてんの？」

がつと奴の襟首を掴んでがつくんがつくん揺らしてやる。
教えてやる、教えてやるともこの朗報を！

「もうすぐ！夏休みだから！あんたと！会わんで！済むんだ！ヤッ
ホー！」

「テンション高いねー、あかりさん。」

天高く拳を突き上げたあたしと、揺さ振られながらもここにこして
るこいつ。

どちらにかは知らないが、微妙に温い視線が、間違いなく注がれて
いた。

「けどねーあかりさん。」

このときのあたしは。

「盛り上がってるとこ悪いけど、」

まだ、

「…何よ？」

まだ、

「…言いにくいんだがね、真壁くん。」

「…何ですか事務長。」

まだ、知らなかった。

明後日の方向を向いた事務長が、申し訳なさに告げた真実を。

「実はその…久留米くんのとこのサークルがね、夏休みに旅行に行くんだが…。」

「行けばいいじゃないですか。」

「あかりさんも行くんだよ。」

…はい？

え、何で？

奴の襟首をひっ掴んだまま、ばかーんと事務長を見詰めること数秒。

「大学の宿舎の食堂係が辞めちゃってね、学長がよろしく頼むってうちに言ってきたんだが…」

つまり。

そうは言われても、事務室職員は皆既婚者で。

スケジュールの都合上、たまたま空いてたあたしに白羽の矢が立ちやった訳で。

しかも。

そのサークルとやらにこいつがうっかりいたりしちゃった訳で。

「…………マジでか。」

「マジだよ。」

「…すまんね。」

明後日に向けたままの事務長のつるつばげに目を細め、あたしは密

かに、涙を飲んだ。

「楽しみだよねー。」

「…そうだね…。」

がくりとうなだれたあたしの横は、対照的にキラキラエフェクトで眩しく。

また、涙が出た。

お母さん！

あなたの娘は、何だか泥沼ですよー！

御免なんです。

青い海、白い雲、眩しい太陽に…

「……はあ。」

溜め息混じりなあたし。

そう、来てしまいました。

むかつくほどの美人率いる『恐怖の夏合宿』に！

ああ、日差しに倒れてしまいたい。

そして救急車で運ばれて、熱中症だからすぐ帰宅しなさいとかドクターストップ掛かって、わだかまりもないままに『それじゃあ仕方ないよね』的な空気で意気揚々とこの場を去れるのに！

「まだそんなこと言ってるの、あかりさん。」

出た。

「言ってますんが。」

「モノローグで。」

だから、お前はエスパーか。

「毎回読まないでよ、プライバシー侵害しまくりだよそれ。」

「ただ漏れなんだもん。」

につこにつここと相変わらずなエフェクトを飛ばすは、事の元凶、久留米航太。

あたしは極力関わりたくないから自力で行くと言ったのに、無理矢理サークルメンバーの車に押し込まれた挙げ句、ちゃっかり隣に座りやがって、根掘り葉掘り根掘り葉掘り…

「お前は何なんだ！」

「まあまあ。」

何がまあまあののか！

何が！！！！！！

いっそのこと、こいつのエフェクトで倒れたらいいのに、あたし。

「……はあ。」

「溜め息吐くとしあわせ逃げるよ。」

「…もう逃げてる。」

あんたの所為で。

見上げた空はやっぱり青く、少しだけ、これから涙した。

「何あいつ。」

「航太にべたべたしちやって。」

冷たい視線と大いなる誤解には、まだ、気付くことなく。

500万が498万になっちゃうけどいいの？(前書き)

会話の応酬だらけです。

文とは言えない小話シリーズ。

500万が498万になっちゃうけどいいの？

だいちゃん「500万かーどうすっかなー」

ヒロシ「あ、だいちゃん！」

だ「おーヒロシ、お前何やってんの？」

ヒ「生きてんの」

だ「知ってるから。そうじゃなくて。……働いてんの？」

ヒ「働いてるよーバイトで！」

だ「バイトって」

ヒ「結構きつけど」

だ「月いくら？」

ヒ「5万！」

だ「5万て（・・）」

ヒ「結構大変なんだぜー時給850円だしさー」

だ「850円で（・・）」

高校生並みの時給なヒロシ。

だ「……いくらかやるつか？（ちよつと可哀相になった）」

ヒ「え、何で何で何で!？」

だ「いや何かさ、急に仕事（だいちゃんは大学生でIT系の仕事も自分でやってる）で儲かっちゃって、500万あるんだ」

だいちゃんはいい人。

ヒ「えーいいよ……悪いじゃん」

でも期待するヒロシ。

だ「んー（あんましやつてもこいつのためになんないか？）……取り敢えず2万でい？」

ヒ「2万!？」

だ「うん」

ヒ「500万から2万もやっちゃったら498万になっちゃうじゃ

ん！何かキリ悪いけどいいの！？」

でも貰うヒロシ。

だ「貰うのかよ」

ヒ「わー2万も貰っちゃった……わー」

だ「足しにしろよ（生活費の）」

ヒロシは実家住まい。

ヒ「うん！ジ　リ展行くね！」

だ「だから、生活費の足しにしろって」

ヒ「お土産はジジのぬいぐるみでいい？」

聞いてないヒロシ。

だ「いやだから……。てか、お前どこでバイトしてんの？」

ヒ「デイリーヤマ　キ」

今どきなかなか見ない。

（ある意味レア）

ヒ「もうすぐ春だからさー楽しみいっぱいだなー」

だ「楽しみ？……まあ、いいけど。ちゃんと（生活費の）足しにするよ」

だから、ヒロシは実家住まい。

しばらくして。

だいちゃんの友人「あ、だいー！」

だ「おう、どした？」

友人「この間さ、ジリ展でヒロシ見たぜ。ジジのぬいぐるみ買ってたけど」

だ「……」

ヤマ キも春です。

だいちゃん「もうすっかり春だなー」

ヒロシ「あ、だいちゃん！」

だ「おーヒロシ。どこ行くの」

ヒ「バイト先！」

だ「バイトじゃなくて？」

ヒ「バイトは終わって帰って来たんだけど、超重要なもの忘れたの
！」

だ「超重要なもの？」

ヒ「バイト先結構かかるんだけどさーやっぱ、超重要なものだから
」

だ「だからそれ何だよ」

ヒ「春のパン祭りでしょ？」

だ「『でしょ？』って言われても」

確かに。

ヒ「だーからー！まつつん（松た 子のことらしい）が毎年CMしてんじゃん！春のパン祭りだよ！」

だ「（ああ、あれね）……それがどうしたんだよ。ああ、バイト先デイリーヤマ キだっけ？フェアだから何か頼まれたとか？（何だ、ちゃんと仕事やってんのか……）」

ちょっとヒロシを見直すだいちゃん。

が。

ヒ「違うよ！だいちゃん「違うのかよ！」俺あれ集めてんの！ポイントシール貼った紙、バイト先に忘れちゃったの！」

ヒロシ大慌て。

だ「ポイントって……わざわざ買ってたの？（食パンを？）」

ヒ「前にさーバイト中シールはがして貼ってたんの店長にばれちゃって。怒られたー」

だ「はがすなよ」

それは怒られる。

ヒ「あ、急がないとだった!」

だ「そんな慌てなくても。明日でもいいじゃん、もう暗いぜ」

ヒロシのバイトは主に日中。

(朝は起きられない)

ヒ「だめだよ!夜バイトのゆうくんも集めてんの!取られたら大変だもん!」

だ「誰だよゆうくんて」

確かに。

ヒ「ゆうくんはゆうくんだよ!春のパン祭りは危険(?)がいつぱいなんだよ!」

だ「危険が?春のパン祭りに?ヤマ キ春のパン祭りに?」

ヒ「じゃーねー!急がないと、バイト先まで30分かーかーるーかーらー!」

だ「遠つ (・・)」

だいちゃんに見送られて、ヒロシは自転車で颯爽と去っていった。

だ「……春だなあ」

春ですね。

おばさん、それはまずいんですよ

道でばったり。

？「あらーだいちゃんじゃない！久しぶりねー！」

だいちゃん「あ、ヒロシのおばさん。お久しぶりです」

まさかのヒロシ母登場。

だ「ヒロシは？」

ヒ母「バイトよバイト！デイリーヤマ キー！」

だ「（まだやってるんだ）……頑張ってますね」

ヒ母「もうねーいい歳してふらふらしてーまいっちゃうわー！（その割りに明るい）」

ヒロシ母は根明。

（ヒロシとある意味そっくり）

ヒ母「あ、ちょっと待って、待っててだいちゃん！」

だ「はあ……」

待つこと30分。

ヒ母「待ったー!？」

だ「はあ、まあ、だいぶ」

ヒロシと激似な母。

だ「まあいいですけど(慣れてる)何持ってきたんですか？」

ヒ母「これねーだいちゃんにあげるわ!うち、いっぱいあってねー!」

だ「おばさん声でかいっすね」

ヒ母「やあだあーだいちゃんてば!おばさん照れちゃっわー!」(？)
「

だ「そうっすか(やっぱり慣れてる)」

ヒ母「はいっ!」

だ「これは……」

ヒ母「ヤマ キ春のパン祭りで貰えるボウルだけど」

だ「えっ（．．）」

これが噂のと思っただいちゃん。

だ「い、いいんですか？確か、ヒロシがすごい集めてるって……
（てか、いらない……）」

ヒ母「いーいーのーよー！あの子毎年毎年貰ってきて、うちいっぱいあるんだから！」

だ「いっぱいって……」

ヒ母「50枚くらい？」

だ「あり過ぎ（．．）」

ヒ母「でっしょー？貰って貰って！だいちゃんほら、一人暮らしだ
って聞いたしね！」

春のパン祭りボウルが、何かの足しになるのかは謎。

ヒ母「ね？」

だ「は、はあ……」

だいちゃん、押しに負ける。

しばらくして。

ヒロシ「はあ……」

だ「よう、ヒロシ。……どうした？元氣ないな（バイトくびになつたとか？）」

憔悴のヒロシ。

ヒ「実はさ、3年前の春のパン祭りでまっつん（松た子）がCMで使ってたのと同じ型のボウルが、どっかいつちやって……はあ」

だ「もっと別のことで落ち込めよ」

ヒ「だってだって！あれ、シール30枚必要でさーなかなか貯まらなくて俺、かなり苦戦したのにさー……はあ」

ため息が止まらないヒロシ。

だ「そのボウルだって、きつとどっかにあ……（・・）」

回想

ヒ母「はいっ！」

だ「これは……」

ヒ母「ヤマ キ春のパン祭りで貰えるボウルだけど」

回想終了

だ「あれか」

ヒ「え？」

だ「いや、何でもない何でも」

ヒ「そう？じゃあ俺、バイト行くから……はあ」

心なしか、自転車もゆっくりなヒロシ。
それを見送るだいちゃん。

だ「やばいな、ヒロシの憔悴ぶり、尋常じゃな……」

ヒ母「あらーだいちゃん!」

だ「あ、おばさん!あの、この間のボウルなんですけど、」

ヒ母「あらー気に入ってくれたー!?じゃ、ちよつと待ってて!また持ってくるか「それはまずいんですよ」……何で?(きよとん)」

だ「何でもです。ヒロシが激痩せます」

ヒ母「やあだーだいちゃんてば超 意味わっかんない!」

だ「おばさん、若いのはいいんですがとにかく春のパン祭りシリーズはだめです。門外不出でお願いします」

ヒ母「えー」

だ「えーじゃないです」

ヒ母「50枚あるのに?」

だ「あり過ぎですがだめです」

ヒ母「えー」

えーと言いたいヒロシ母の気持ちもわかる。

後日、だいちゃんはそのつとヒロシ母に3年前の春のパン祭りであつんがCMで使ってたというボウルを返却。

ヒロシは、

ヒ「あ、だいちゃん!」

だ「ヒロシ……（絶句）」

ヒ「あ、ばれたー? 悩みがなくなってね、そしたらたくさん食べちゃってー」

太っていた。

マヨネーズラー（前書き）

所謂マヨラー！。

マヨネーズラー

だいちゃん「あつついなー」

ちりりんっ。

ヒロシ「あ、だいちゃん！」

だ「おう、ヒロシ……うわあ痩せる気ねー」

ヒ「ぢゅ　　っ、え？」

だ「え？じゃないえ？じゃ。それはない」

マヨネーズ片手に登場のヒロシ。
どどん肥えている。

だ「お前さ……夏バテとかないの？（なさそうだけど）」

ヒ「ない。」

だ「やっぱりないんだ……」

妙に納得。

しかも、自転車の前カゴにはマヨネーズ常備（未開封）。

だ「（悪くなりそうだな）……で、どこ行くの？」

ヒ「バイト！」

だ「マヨネーズ乗せて！？（・・）」

遂に奇行に走ったヒロシを心配そうに見つめるだいちゃん。
それは常であるとまだ認めたくないだいちゃん。

だ「おい、お前……」

ヒ「あ、やっぱーい！急がないとバイト遅れちゃうから！」

だ「あ、おい、」

ヒ「いっぱいあるから、だいちゃんにもあげるね！」

（未開封）マヨネーズを手渡されるだいちゃん。

だ「い、いらな、」

ヒ「夜バイトのゆうくんと流行ってんの！ぢゅ

っーじゃ

あねー！
」

颯爽と、しかし、心なしか前よりはあはあ言いながら去っていくヒロシを見送りながら。

だ「…マヨネーズ嫌いなのに」

（未開封）マヨネーズに、うっかり本音を零しただいちゃんでした。

そしてヒロシは。

ヒ「最近体が重いなー」

気づいていなかった。

ある日、洗濯機の中に腕が一本落ちていた。

「珍しいこともあるもんだ」

くわえ煙草でそう言ったあたしに、遊びに来ていた後輩の深雪^{みゆき}が「何かありましたか」と顔を覗かせた。

「前に蛙が干からびてたことはあつたんだけど」

「蛙ですか」

「うん蛙」

荻窪にも蛙がいるもんなのかと、そのときは感心したものだが。

「で、今回は何がいたんですか？」

「腕が」

「はい？」

「腕があつた」

「まさかー」とけらけら笑う深雪に、「だよねー」と笑って、一回、洗濯機をばたんと閉めた。
また開けた。

「やっぱりあるんだけど」

「蛙が？」

「いや、腕が」

どうしたもんか、これはまいった。

誰の腕かは知らないが、取り敢えず、あたしんちの洗濯機の中にあるのは困る。

やはり、都会とは物騒なんだろうか。

「ねー深雪」

「何ですか」

「腕って生ゴミであつてる？」

「粗大ゴミじゃないことは確かですけど」

「肘下なら粗大じゃないよね」

「そうですねー」と相槌を打った深雪が、ビールを取りに冷蔵庫を開けた。

「先輩」

「ん？」

「粗大かも」

くわえ煙草で顔だけを部屋に戻したなら、冷蔵庫から顔を出した深雪と目が合う。

「ビールじゃなくて、肘上が冷やされてます」

「やだ、肩下ってこと？」

「はい」

昨日の昼間に冷やしておいた筈のビールは、一体どこへ行ったのか。

「じゃあ粗大かなあ」

「分割されてるから、やっぱり生ゴミでいいんじゃないですかね」

「あんたが粗大かもって」

「やっぱり生ゴミですよ」

ビニール袋にそれを詰め込む深雪に、「あ、これも」と洗濯機の中の腕も渡した。

何となく考えていたことを深雪に聞いてみた。

「二十五過ぎると妖精になれるんだって」

「何の話ですか」

「処女の話」

「処女なんですか」と聞かれて「違うけど」と答えた。

処女じゃないけどセカンドに突入してだいぶ経つ。

妖精にはなれなくても、穴は塞がるんじゃないだろうか。

いや、処女膜が再生しないことくらい、あたしだって知ってるけども。

「ちなみに男だと何になれるんですか」

「魔法使いだつて」

「魔法使いの方が格上じゃないですか」

確かに、妖精は魔法使いが連れてるイメージがある。

あんまり、魔法使いが妖精に連れられているイメージはないかもしれない。

こんなところでまさかの男女差別だろうか。

いや、格差？

これが男女の格差なのか。

「根本から正していかないとな、やっぱりなくならないものかね」

「何の話ですか」

「格差の話」

「魔法使いの話だったんじゃないんですか」

「まあね」と答えてから、煙草に火を点けた。
ああ美味しい、煙草が美味しい、人生は最高だ。

「いやはや、素晴らしい」

「魔法使いが？」

「いや、人生が」

「妖精の話はどうしたんですか」

深雪もまた煙草に火を点けたところで、妖精になった自分を考えてみた。

「気持ち悪い」

「まあ、気持ち悪いですよね」

メルヘンは似合わない。

ファンタジーも似合わない。

人生は素晴らしい、が、人生とは現実だ。

「これ、どうすんの」

「見ないで返却も癪ですけどね」

レジで誤って誰かのものと入れ替わったらしいレンタルDVDに、溜め息が出て煙が揺れた。

「『Dカップハイスクール』って」

「『にゃんにゃん言わせて』って」

「まんまじゃねえかよ」

登場する方々について、ある意味誰かの妖精なんだろうなとか、そ

んなことを考えてから。

あたしはやっぱ、妖精より魔法使いの方がいいよと言ってみた。

「穴が塞がらない魔法とか使えるんですかね」

「カビが生えない魔法とかね」

さて、このDVDをどうしようか。

アパートでぐだぐだしていれば、呼び鈴さえ鳴らさずに深雪が入ってきた。

「ただいまです」

「何あんた、ここに住んでんの」

「そんなもんですね」

手にはしっかりと合鍵が握られていた。

いつ作っただとか、もう面倒でどうでもいい。

「さ、芋育てますよ先輩」

「芋？」

「家庭菜園キット買ってきたんです」

よいしょとあたしの目の前にそれを置いて、やる気満々に腕まくりをした深雪を見上げた。

芋だろうがトマトだろうがどっちだっていいけども。

「うちで育てんの？」

「他にどこで育てんですか？」

「あんたんちでやれば」

「うち引き払ってだいぶ経ちますよ」

「あ、そうなの」

ずいぶんとうちに居座るなと思ってたけど、何だ、もう住み込んだのか。

「て、おかしくね？」

「まあまあ」

「もしかして体狙い？」

「先輩がDカップだったらそうかもしれないけどね」

失礼な。

「Aだって需要あるよ」

「あるんですか」

「ないこたあないって程度？」

「聞かないでくださいよ」

あたしにもわからん、と言ったなら、人間体じゃないです顔ですと、
実も蓋もない答えが返ってきた。

どっちもどちなあたしは、じゃあ、何で勝負に出たらいいんだろ
うか。

「だから家庭菜園ですよ」

そうなのか。

「ベランダ遊ばせてるのはもったいないですよ」

「で、芋？」

「秋ですから」

「メロンがいい」

「それ夏ですから」

そうは言っけども。

「今から育てんだよね？」

「はい」

何か？みたいに首を傾げた深雪は、どうやらおつむが足りないを見た。

「今から育てたって今秋中には食べないじゃん」
「あ、」

『いーしゃーきいもっ、焼き芋ー』

沈黙の中、お馴染みのメロディがアパート下を通った。

「……買いに行きませんか？」

「屁こかないでよ」

「先輩こそ」

家庭菜園キットは、間違いなくお蔵入りだと思った。

4（前書き）

主催の短編投稿企画『酸欠』投稿作品を転載。
企画テーマは『調味料』テーマは『味噌』でした。

今日も荻窪は晴れていた。

「味噌食べたくなる空じゃないですか？」

「青いのに？」

「青は味噌ですよ」

そもそもが味噌食べたくなる空つてのがよくわからないが、深雪は味噌を食べたいらしい。

てか、味噌食べたって何だ。

窓から覗く空は青い。

そして、冷蔵庫をさがさと漁った深雪を視界の端に捉えていれば「じゃーん、味噌でーす」とか言って、本当に味噌達が登場を果たした。

「味噌『達』ね」

「味噌です」

「複数系でしょ、てか何で味噌がそんなに」

いつの間にか同居人と化していた深雪は、いつの間にか冷蔵庫を掌握していた。

そして、いつの間にか味噌コレクションをしていたらしい。

「で、何作ってくれんの」

「食べ比べじゃだめですか」

「味噌の？」

「味噌の」

何で味噌だけなのと聞いたら、味噌って高いんですよと当然に返される。

つまり、

「味噌に食費をはたいたわけね」

「だって味噌ですよ」

「そりゃ味噌だけでも」

調味料として活躍してこそ味噌だとは思うが、しかし、空の青に立ち向かわんばかりのそれらは、深雪の前で堂々として見えた。

たかが味噌なのに。

しかしながら、これだけの味噌ならば、深雪がその頭上に掲げる味噌より内容は濃いことだろう。

「人生って深いね」

「何の話ですか」

「味噌の話」

「ニユアンスが……」

「味噌の話だよ」

言い切る。

「腹減ってきたじゃんか」

「味噌がありますって」

あんたにもあればよかったのに。

そうは言わずに食べた白味噌は、思ったよりも濃厚だった。

「甘く見てた」

「意外と濃厚じゃないですか？」

「あんたと違う」

「だから、何の……」

「味噌の話だよ」

絶対違うと首を捻る深雪と味噌を見比べて、食べた白味噌は、何と驚きの八百九十円だった。

「高い！」

「白味噌バカに出来ないですから」

「あんたと違う」

「だから何が……」

さて、明日からの飯をどうしようか。

「食事に誘われた」

「快拳ですね」

「……もっと何かさあ、盛り上がってみてよ」
「快拳としか言えません」

一応うだうだと続けている会社の後輩に、何とまあ、今度食事に誘われた。

うきうきはしない。

何故なら、あたしは年上好きだ。

「が、しかしだ」

ぐ、と握り拳のあたしの横で、深雪はどうでもよさそうに耳掻きをしていた。

本当にどうでもいいらしい。

「三年ぶりのときめき珍事なわけ！もうこれは、食っちゃうしかないわけ！」

「いきなりジャンプですねー」

「ホップもステップも踏んでらんない」

順番なんぞ気にしていたら、永遠にステップ止まりな気がする。
永遠にステップって、どんなテンションだ。

「でも、見切り発車はよくないですよ」

「遅いよりよくない？」

「何の話ですか」

「発射の」

「発車の？」

「致してる最中の方……あ、終わりかな？」

言つて空しくなつたのは勘違いであつて欲しい。

発射とかフィニッシュとか、どんだけ飢えてんだつて話だ。

「あたしは飢えてない」

「覆しましたね」

「飢えてるっちゃ飢えてるけど」

「どっちですか」

耳搔きを終えた深雪が、冷蔵庫をがさがと漁り出した。

「味噌しかないですねー」

「ないよ」

「お腹空きました」

「だから飢えてるつて言つたじゃん」と言えば、「ああ……」と遠い目で答えられた。

「後輩に米貰つてきてください」

「その手があつたね」

「使えるもん使わないと飢えが満たされません」

「味噌お握りが作れるね」

性欲より食欲。

男じゃ満たされないと悟つた、荻窪アパート一室のあたし達だった。

後日、飢えが限界の深雪も連れて後輩との食事に行けば、ジャンプ

したのは深雪の方だった。

「見切り発射でした」

「あんたもね」

あな恐ろしきは美貌の彼女。

大人の事情（前書き）

愛憎渦巻く昼ドラみたいなものが書きたかったようです。

大人の事情

わたしにとって、義父は男でした

母はだらしない女だ。

それは何か一つに關してのことではなく、所謂、金、男、生活全てに
そう言える。

誰の子供かさえわからないわたしを産み育てたことは、ある意味奇
跡に近いことだ。

それでも、親らしい愛情などさして感じたことはなく、幼い頃の学
校行事など来てくれた試しはない。

だからと言って暴行を加えられたことがあるわけではなく、それは無
関心や放置に近いものだ。

しかしながら大学まで通わせてくれた母を感謝こそすれ、憎んだこ
とはない。

不思議に思ったことはあつたが、わたしにとっての日常はこれであ
り、周りの反応も別段気になつたことはなかつた。

鈍感と言えはそうなのかもしれないわたしの感性は、この環境に適
応していたとも取れる。

シングルマザーなど、今のご時世では大して珍しいものではないの
だから、悲觀的になることもなかつた。

様々なことにおいてだらしない母ではあるが、それ故に浪費される
金は、パトロンがきちんと返済している。

不幸中の幸いとも取れる循環に気付いたとき、世の中は上手く出来
ているものだと感じたものだった。

「結婚しようと思うの。」

珍しく団欒の場を設けられ不思議に思っていれば、見たことのない笑顔で、母はそうひとこと言った。

結婚ということは、おそらくは初婚ということなのだろう。母が離婚したという話は今のところ聞いたことがない。

「いいんじゃない。」

大学まで出してもらったのだし、わたしももう社会人三年目になる。義父が出来ることは不思議な感覚だが、拒否する理由はない。母がこれで落ち着くのなら、寧ろそれは喜ばしいこともある。

「和希^{カズキ}ならそう言ってくれると思ったわ。」

「そう、何にしてもよかったじゃない。いい人に出会えて。」

「ええ。」

心底ほっとしたのは、娘としてか人としてか難しいところだ。数々の目に余る母の行いに終止符が打てるのなら、どちらにせよいい結果なのだろう。

「じゃあ、一度会ってみてくれる？」

「うん、わかった。」

小さなテーブルを挟んで幸せに笑う母に同じく笑顔を返して、食べ終えた食器をキッチンへと運んだ。

二十五歳で義父とは言えど父が出来ることに、心なしか嬉しいと思ったわたしは、少しだけ、本心からの笑顔だった。

「もしもし。」

『あ、和希？お母さんだけど。』

母からの電話など珍しい。

大抵は面倒だからと、メール一つ満足に返さない人だ。

「どうしたの。」

『今夜は暇？』

「まあ、仕事が片付けば。」

『会わせたいのよ、あの人に。』

あの人という言葉に、いつぞやの会話をようやく思い出した。あれは一週間ほど前だったろうか。そうだ、わたしには義父が出来るのだ。

「じゃあ、何とかするよ。」

『今夜八時に、料亭松野屋でね。青柳^{アオヤギ}で予約しておくから。』

用件だけ伝えたと電話はさつさと切れてしまった。

悪気がないことは百も承知で、それでもこんな素振りで社会に出ている母を時折不安にも思う。

悪気ないということは無意識に他ならず、無意識の行動は意識していないからこそ質が悪い。

「誰？」

明らかに妙な勘違いをしているちひろに、母からだと告げ、メニューを開いた。

「へえ、この歳で義父さんね。」

ランチプレートのサラダを弄びながら、一通りを聞いたちひろが興味深い声を上げた。

「いくつの人？」

「さあ。」

「さあつて。」

「聞きそびれたから。」

付け合わせを口に運びながら、そういえばと思考を巡らせる。

娘より年下とは考え難いが、あの母ならば有り得ないことはない様なことではない。

わたしはＯＬだが、同じ社会人であっても、母は夜の仕事をしている。

幼い頃はキャバクラであり、今はスナックで働いていた。

若い頃に生んだので、まだ四十二歳、花盛りといえは花盛りだ。外見からは到底そうは見えず、恋人らしい男の影は常にあった。

「結婚決めたくらいだから、きちんとした人だとは思っけれど。」

「まあ、そうよね。」

頷きながらサラダを頬張るちひろを横目に、そうであって欲しいと、窓から見える空に目を細めた。
とにかくわたしは、八時に間に合う様、仕事を片付けなければなら
ない。

「頑張るか。」

「そうね。」

ちひろと目を合わせ微笑むと、少し楽しみにも思えてくる。
このとき確かに、わたしは母を祝福していた。

何とか片を付けた書類に一瞥投げ、壁に掛かる時計に目をやる。
七時半少し前を指す針に、漸く息を吐いた。

「何とか間に合いそう。」

母は機嫌を損ねると面倒な程拗ねてみせるので、それだけは避けね
ばならない。

特に、こんな日はそうだ。

苦笑を滲ませながら薄手のジャケットに腕を通せば、裏地のサテン

がひやりと肌を刺激した。

バッグを肩に掛けたところで携帯のバイブが鳴る。
取り出して開けば、案の定母の名前が点滅していた。

「もしもし。」

『和希、どう?』

「今から行くから間に合うと思う。」

『そう、よかった。待ってるから。』

またも身勝手に切られた携帯をバッグに押し込んで、まだ残っていた同僚達に軽く挨拶をしながら、わたしは会社を後にした。
義父が出来る、わたしに義父が。

初めてのことにこの歳で踊る胸を抑えながら、料亭に向かう足取りは軽くもあり重くもあり、不思議な感覚に捉われていた。

待ち合わせの料亭は近辺ではそこそ有名なもので、和風造りの門構えは、仄かな灯りで照らしだされ落ち着いた雰囲気醸し出していた。

「青柳で予約している者ですが。」

「お待ちしております。お連れ様は既にいらしておりますよ。」

品のいい店員に連れられ廊下を歩く。
過ぎていく各部屋からは、いい匂いが鼻を突き、時折上がる楽しげな笑い声が、わたしの期待感を膨らませる。

「こちらです。」

「ありがとうございます。」

桔梗の間と書かれた部屋の前で踵を返した背中を暫し見送ってから、
一つ、深呼吸をした。

特別いい顔をする必要はない。

けれど、これからは家族になるのだ。

悪い印象を与えるのは得策でないし、そんなことをするつもりは毛頭ない。

どんな対面が一番いいだろうかと、余りにくだらないことに頭を悩ます。

母しかいなかったわたしに、しかも、ごく一般的な家庭というものからは多少なりとも離れた環境にあったわたしには、それは至って難しいことに他ならない問題でもあった。

襖に手を掛けたまま悶々としていれば、からりとそれが呆気なく開かれる。

「ああ和希、やっぱり。」

やや呆れた面持ちの母が、目の前で笑っている。

「早く入りなさいよ、冬吾さんも待っていたんだから。」

「…え？」

慌てて腕時計を確認すれば、針は無情にも八時十分を指していた。

「す、すみませんでした、遅れてしまつて…。」

申し訳ない気持ちで、母の肩越しに部屋を覗き込んだ。

「ああ、いや、こちらこそ急で申し訳ないね。」

柔らかなハスキーボイスに優しく細められた目、四十代中盤である歳の割りに、清潔感のある雰囲気と端正な面持ち。時が、止まった。

正確に言えば、それは錯覚に過ぎないけれど。

「和希？」

母の一声で、弾かれた様に我に返る。
小さく揺れた肩に、僅かな罪悪感が胸を掠めた。

「…大丈夫よ、本当に遅れてしまつてごめんなさい。」

何事もない顔を作つて、母と共に部屋に入った。

間違いなくこの時、わたしの目に映つた彼は、義父ではなく一人の男だつた。

簡単な自己紹介の後、他愛ない会話でその場をさりげなくやり過ぎながら、傾けたグラス越しにそつと彼を盗み見る。

青柳冬吾と名乗つた男は、終始満たされた表情で母と談笑していた。それはそうだ、彼は母と結婚する。

母と結婚を決めたくらいなのだから、少なからず出来た男なのだろう。

醸し出す雰囲気はもちろん、ぴしつと調べられた品のいいダークグレーのスーツが、自ずとそれを物語る。

品定めさながらの行為は果たして、母の夫としてか、義父としてか。そのどちらでもないことを、わたしは既に承知していた。

「和希、さつきからどうしたのよ。」

母の言葉に、思考を一旦中断する。

「飲んでいるわよ。」

「そっじゃなくて。」

「やっぱり…やりづらいかな？」

ふいに口を挟んだ彼が、少し寂しげな笑みを浮かべた。

「そんなこと。」

今出来る精一杯の笑みで返すわたしは、狡猾な女狐のようだ。

それに気付かない母に内心ほくそ笑みながら、彼　冬吾さんに
向かって言葉を続ける。

「素敵なお義父さんで緊張しちゃって。」

「ふふ、でしょう。」

至極幸せに笑う母の隣で、一瞬、本当に一瞬、眉をひそめた表情を
捉えた。

気付かれたらどうか。

わたしの向ける視線が、彼が求めるそれと違う意図を含んでいるこ
とに。

「…そうかな、わたしもだよ。」

思い直したのか気の所為だと思ったのか、すぐさま戻された表情か

ら、それを読み取ることは出来ない。

気付いてしまえばいいのに。

そう思ってしまうわたしは、とんだ親不孝者に違いない。

「いつから同居を？」

空のグラスに手酌で並々とビールを足しながら、何気ない素振りを装って尋ねる。

「出来るならすぐにでもしたいわ。」

「そうだなあ。」

「籍は入れてから？」

「わたしはどちらでもいいよ。百合さんは…。」

「いやだわ、もう。源氏名はやめてよ。」

どうやら店の客であつたらしい。

会話に参加しつつ目を細めた自分の頭の中が、酷く冷静に分析していることに、わたしの中の女を再確認した。

ほどよく酔いが回ってきたのか、母が冬吾さんの腕に絡み付いていく。

母の女である部分を目の当たりにすることは、決して初めてではない。

笑顔は貼り付けたままだが、内心は面白くなかった。

「ちょっとお母さん、あたしもいるのよ。」

「そつだよ百合さん…希望^{ノゾミ}さん、和希ちゃんが…あ。」

「え？」

母の名前を言い直したかと思えば、ばつが悪そうに冬吾さんがわたしを見た。

「どうか？」

首を傾げて問い掛ければ、四十代とは思えない顔で、酷く可愛らしくはにかんで応える。

「いや、君の年齢を考えると和希ちゃんはないかなあと…。」

その表情に、その台詞は狡いのではないか。

確かにちゃん付けで呼ばれることなど、最近はめつきり減った。そんな歳でないことも、しっかり自覚があるけれど。

「いえ、構いませんよ、お義父さんですもの。」

そんなことは微塵も思っていなかったけれど、何となく嬉しくなり、笑顔でそう応えた。

母が泥酔したものの、初の顔合わせは上々であつたろう。

現に気分屋の母は終始笑顔で機嫌がよかったし、冬吾さんも同じく饒舌であつた。

僅か匂わせた女の部分でさえ、終わる頃にはさして気に留めてはいない様子だったのだから。

「じゃあ、わたしはこれで…。」

「あらいいじゃない、今日は帰りたくない気分だわ。」

お開きというところで媚びた様に駄々をこねる母に、一瞬だけ冷ややかな視線を向ける。

「和希ちゃん？」

訝しげに呼ばれ、またすぐ笑顔を貼り付けた。

「いえなんでも。すみません、いつまでも子供みたいで。」

「いや、しかしどうしたものかな。」

そうは口にしても、決して冬吾さんの表情はそうでないことくらい一目瞭然であった。

「今夜はどこかに泊まってきたらいかがですか。わたしは大丈夫ですから。」

今のところは口にせず、にこやかで物分かりのいい娘を演じてみせる。

「そうか、すまないね。」

「いいえそんな、母をお願いします。」

深々と頭を下げてから、片手を振って遠ざかる背中を見送った。遠くなるそれが今のわたしと彼の距離なのだと、妙に冴えた頭で思いながら、どれだけ自分が狡猾であるのかと少しだけ反吐が出そうにもなる。

ああそうか、自分も女なのだ、一目惚れをすれば嫉妬もする。相手が例え母であろうとも。

「…飲み直すかな。」

小さな呟きは呆気ないほど夜の喧騒に飲まれ、見えなくなったその

先を只、目を細めて見据えていた。

義父であろうと、母の相手であろうと、わたしは確かにあの男が欲しい。

そう思ってしまったのだから、もう仕方がないのだ。

大人の事情で振り回された過去を悔いてはいない。

だから今度は、それを利用してやるまでなのだ、踵を返し、ヒールを鳴らしながら、わたしは何故か、笑っていた。

取るに足らない関係

昨晚、母は帰って来なかった。

当然といえば当然だが、がらんとしたりビングに、胸くそ悪く思った自分がいた。

現状で冬吾さんは母の恋人であり、泊まったのならすることなど知れている。

それがわからない程子供ではないし、出会いが出会いだからこそ、嫉妬するだけ馬鹿げていることも頭では理解していた。

眉間の皺を伸ばしながら悶々とする思考を振り払い、まだ残るアルコールを飛ばすべく、バスルームへと、足を運んだ。

「おはよう和希。昨日はどうだった？」

いつもより早く着いた会社に入れば、ちひろが笑顔で近づいてくる。どうだったかと言えばある意味手応えはあったが、もちろん、そんなことを言うつもりはない。

「いい人だったよ、よく出来た人。」

「よかったじゃない。」

自分のことの様に喜んでくれたちひろに、少しだけまた、眉間に皺が寄った。

母に対しては感じなかった罪悪感。

ちひろに対して感じるのは、間違いなくそれだ。

「ごめん。」

「いやね、何のことよ。」

きよとんとして微笑むちひろは、良き同僚であり、良き友人でもある。

「…心配させてってこと。」

本心を言えないからだとは告げずに、また、嘘を重ねたことに。全てに対しての謝罪を口にして、笑ったわたしは、やっぱり狡い。

「いいのよ。」

それから他愛ない話をして、ランチの約束をしてから席に着く。

昨晩片付けた筈の書類の上には、初めて目にする、わたしのものではない新たな書類が積まれていた。

思わず深い溜め息を零してから、隣の席に視線を投げる。

いつの間にか出勤していた席の主は、へらっと笑ってそれに応えた。

「…松本、どういうこと。」

「おはよう葛城。」

「おはようじゃないわよ、これ、あんたの仕事じゃない。」

よく言えば柔らかな笑みを浮かべる、悪く言えば気抜けた雰囲気のは、ちひろと同じく同僚の松本春日。まっもと はるひ

地毛だという柔らかな茶色の髪をふわふわさせて、にこやかな顔でわたしに仕事を押し付ける曲者だ。

「昨日の内に仕事片付けてたみたいだから、少し、手伝ってもらおうかと。」

悪気なく笑うそれも、既に、日常茶飯事である。

「少しじゃないわよ。」

どれだけ押し問答をしたところで、結果は既に見えていた。

また溜め息を吐きながら、肩を落として、仕方ないながらも書類に目を通すことにした。

取るに足らない関係（後書き）

このページ自体がまた書き途中……。。

1 (前書き)

暗い感じの不倫ネタ。

堕ちたとしても、それはそれでいいとさえ思った。

貴女が一緒なら、どこまでもとさえ、俺は本気でそう思っていた。

隔てる薄く滑らかな皮膚でさえ、今は酷く邪魔に思えた。

こうして個体である限りそれはどうにもならないことであり、交わることで融解してしまえばなど、到底不可能な幻想に過ぎない。

淫らにシーツの波間を泳ぐ貴女を捉えている筈の行為も、事が済めば、一瞬の様に思えた。

「…どうしたの？」

はあ と軽く吐息し、甘美な余韻を残す潤んだ目を向けて、ひとみさんが身じろぎをした。

そんな姿を見せるのが俺だけでないことを考えると、それこそ、焼け付く様な嫉妬が胸を渦巻いていく。

「…ひとみさん、が。」

白く豊かな胸元に顔を埋め、縋る様に腕を巻き付けた。

「…ひとみさんが、俺のものじゃ、ないから。」

くぐもった声は自分で思うより頼りなく、それこそ、母親に泣きつく幼子そのものだ。
くすくすと、小さく笑った音がする。

いつそ嘲笑であつたなら、貴女を殺して俺も死ぬのに。

「貴方らしくないわね。」

優しく俺の髪を梳き、ひとみさんはそう零した。

確かに今までの俺らしくはない。

散々と言つてもいい程女を漁って、寧ろ、漁らずとも寄つてきたそれらを右から左へと流すが如く食い散らかしてきた。

愛なんて存在はどうでもよかった。

只の欲の捌け口として、口実程度に口にしたことしかなかった。

回した腕に力を込めれば、細腰は容易く折れてしまいそうで。

プライドの高い俺は、旦那と別れてくれとは、きっと、口が裂けても言えないから。

「…このまま死のうか。」

真昼の見えない星に揺れて、掴めない星に焦がれて、誰かを殺めて

しまう前に、せめて、せめて俺と一緒に堕ちて。

多分欲しいのは愛ではない。

欲しいのは器でも心でもない。

貴女そのものが欲しいと言ったら、どんな顔で笑うだろうか。

夢中で滅茶苦茶にっていて、全く気付かなかった。

「ひとみさん、これ…。」

「え?…ああ、ちょっとね。」

無防備に背中を見せて少しだけ笑ったひとみさんの表情は見えない。
安っぽいベッドライトに生白く浮かぶ愛しい肢体。

視線を這わせた先、左肩甲骨下には、煙草を捻じ付けられたであろう火傷が、三つ程あった。

「どこが”ちょっと”なの?」

「大したことな…痛つ…。」

人差し指を当ててぐっと押せば、案の定思った通りの反応を返すひ

とみさん。

「痛いんじゃない。」

「それはそうよ、そんなことされたら。」

くるりと寝返りを打ってこちらを見たひとみさんが、苦笑混じりにそう言った。

こんな痕を付けられて、それでも尚笑うのか。
俺は、赤い花痕さえ許されないというのに。

「どうしたの。」

目を逸らした俺を覗き込む様にして、艶めかしい切れ長の瞳が見上げてくる。

「…何でも。」

細い顎を掬い上げて、貪る様に口内を犯した。

願わくは、この星がいつか俺に堕ちる様に。

朝も昼も夜も、俺だけのものである様に。

腕の中で淫らに啼く幻想だけでなく、永遠になる様に。

「…愛してるよ。」

快樂に引きずられていく瀬戸際で、小さく小さく、愛を囁いた。

くまさんと一緒（前書き）

メルヘンチックホラーなつもりで書き始めた結果、何故か宙ぶらりんになってしまったお話。

個人的に気に入ってはいるので、もしかしたらそのうち再開するかもしれない……。

くまさんと一緒

あたしの部屋には、くまさんがいる。
可笑しな話だけど、いるものはいるのだ。

今は机の上で、ファッション雑誌を読みながら人参を生で貪り食ってたりする。

うさぎさんじゃない。
くまさんだ。

「ちょっと……皮剥かないの？」

「ああ？いいだろ、めんどくせえ」

「いいならいいけど……」

そもそもどこで消化しているのかとか、どうやったら食えるのかとか、愚問に違いない。

皮を剥くか剥かないかなんて、それこそどうだっていいのだろう。

口の回りをカスだらけにして、下着特集のページばかりをぺらぺらと捲っていた。

そもそもなんでくまさんがいるのか。

ことの発端は、バイト帰りの真夜中だった。

「あー遅くなっちゃったな」

自転車を押しながら、吐いた息は白い。
コンビニバイトは十時までだったが、廃棄を食べながら喋っていたらあつという間に十二時を過ぎていた。

「……さむっ」

ハンドルを握る手は、すっかりかじかんで赤くなっている。
とてもじゃないけど、今更乗る気にはならない。

帰り際にもらったホットのお茶が空になり、すぐそこにあつたごみ箱に投げ捨てた。

「いてっ」

「あ、ごめんなさい」

反射的に謝ってから、遅まきにぎくつとした。
真夜中の公園を横切ると近道だと思ったけど、よくよく考えれば、安全ではなかったかもしれない。

空のペットボトルは、誰かにストライクしたと思われる。
が、それは確かに、くたびれた電灯脇のごみ箱に入っていた。

何。

どういこと。

よくわからないけどなんだかこわかったので、とりあえず逃げることにした。

急いで自転車にまたがり、いざ漕ぎ出そうとしたそのとき。

「おい、てめえ。逃げるんじゃないよ」
「ひっ」

やたらとドスのきいた声に、前傾姿勢なまま肩をすくめる。ペダルに掛けた足は、すくんで動かなかった。

早く帰ればよかった。

廃棄のやきとりなんか、食べなければよかった。
ペットボトルなんか、捨てなければよかった。
そもそも公園なんて通らなければ……。

「おい。とりあえずこっから出せ」

ぎゅっと目をつむって悶々としていれば、少し和らいだ声が、ごみ箱から掛かった。

「……おい。早くしろ」

二度目の催促で、そろそろそこに目を向ける。

やっぱり、誰もいない。

「おい！」

目を凝らして見れば、もそもそと動くごみ箱の中の何か。
電灯に照らされて、茶色い何かが見えた。

犬か猫か。

いや、そもそも犬や猫は人語をしゃべるのか。

「おい、早くしろ！」

「……はあ」

そろそろと近づきながら、なんとも曖昧な返事をする。
そしてそこを覗き込んでみれば。

赤まみれのくまさんがいた。

「……えっと」

「……なんだよ」

黒い大きな目はボタンで。

「……えーっと」
「……なんなんだよ」

ふわふわの茶色い毛並みはモールで。

「……えーっと……」
「……おい」

付着している赤いのは。

「……血、ですか？」

ぬいぐるみなくまさんは、独特の臭いを放つ血まみれのくまさんだった。

どういことがどういふうになって、血まみれのくまさんが人語をしゃべるのだろう。

なにがどうなったら、公園のごみ箱に入っているのだろう。

ギャップに翻弄されつつ“あなたの知らない世界”に迷い込んだらしいあたしが、悶々と顔をしかめていれば、くまさんがついに怒った。

「いいから早くこつから出せ！」
「……はあ」

そうしてあたしは、くまさんを拾った。

出してやるだけでよかったのだろうけど、くまさんが肉まんを食べたいと言いだした。

食べられるのが気になって、コンビニで肉まんを買って、アパートに連れ帰った。

結局、くまさんはそのまま居座ったわけで。
今現在も、人參をかじっている。

「やっべえな、この下着。腸ほじくり出して、真っ赤にしてやりてえ」

どんな下着を見てるのか知らないが、くまさんの性癖はおかしいらしい。

ぼりぼりと人參を食う音が、断続的に部屋に響く。
トイレに行くのを見たことがないけど、あの中は綿わたじゃないんだろ
うか。

「お、そろそろ時間だな」

人參を投げ捨てて、くまさんが立ち上がった。

どうやらお仕事の時間らしい。

口元をぬぐって、代わりに手のモールにカスがついていた。

「ついてるから」

「おう、わりいな」

おとなしくカスを取らせてくれながら、黒いボタンの目が、あたしを見ていた。

「……くまさんの仕事ってさ」

「ひとつろし」

小さく問い掛けたそれに、別段どうというわけでもなさそうに答えるくまさん。

どうやったら、くまのぬいぐるみが人を殺せるのだろう。

それはわからないけど。

「じゃ、行つてくつから」

「……いつてらっしゃい」

玄関からひょうひょうと出かけたくまさんは、今日も、血まみれで帰ってくるんだと思う。

だけどたぶん、今日も明日も、くまさんといっしょ。

うさぎさんも一緒

バイトが終わって帰宅した午後十一時四十七分。
冷静にも腕時計を確認したから、たぶん時間は間違いない。

「ただいまー……」

「あら、おかえりなさい」

アパートの軋んだドアを開けてみれば。

「あら、どうしたのよ。入ってきたら？」

六畳一間のそこに、赤まみれのくまさんと、テラコッタ肌の美人バニーガールが、仲良くポテトチップスを貪っていた。

どういふことなのか。

あたしの脳味噌がこの情報を処理するのに、えらい時間を要したのは、言うまでもない。

早くいらっしやいよともなげに促すバニーガールに釘付けなまま、ようやく動きだした脳味噌とあたし。
仕方なく、スニーカーを脱いで、ペットボトル片手にその団らんに参加することにした。

「あの、くまさん、こちらは……?」

わけがわからないので、取り敢えず間を空けて座って問い掛ける。

相変わらず食べカスだらけ赤まみれのくまさんが、ぱりぱりポテトチップスを食べたままに応えた。

「仕事仲間だよ」

「仕事……仲間」

「そう、よろしくねえ」

綺麗に笑ったバンニガールのすぐ隣には、やっぱり、赤まみれのチエーンソー。

当たり前のように置かれたそれは、部屋の中で、一際異彩を放っていたけど。

追い出すのが正解かもしれない。

そもそもが、よくよく考えてみればそうに違いない。

だって、くまさんは仕事から帰ればいつだって赤まみれ。

このバンニガールも、チエーンソー持ちだなんておかしい。

おかしいも何もない。

どうやってここまで持ってきたんだ。

黙って思考を巡らせつつもぱりぱりとチップスを食べるしかないあたしの傍らでは。

「お前またやったのか」

「やったって、どっち？」

「どっちもだろ」

……明らかに、うちでするにはおかしな会話が繰り広げられている。

やっぱり、丁重に退室をお願いしたいと思った。

「だってすきなんだもの。仕方ないじゃない、ねえ？」

バーナールが綺麗に笑って、こともなげに、突然あたしに話題を振った。

ねえ？って言われても。

「何がすきなんですか？」なんて、あまりにこわくて聞けないに決まってる。

「そうなんですか……」

何がそうなんですかなのかさえ、もう、あたしには未知の世界でわからないけど。

曖昧な相槌に、彼女が機嫌を損ねることはなかったら良かった。

ぱりぱりと場違いな音が響く中、さて、と腰をあげたバニーガールがチェーンソーを軽々しく持ち上げる。

隣を掠めた鉄の匂いは、嗅いだことのある、不愉快なものだった。

「じゃあ、そろそろおいとましようかしら」

「仕事か？」

「うーん……趣味かな？」

趣味って何ですか。

やっぱりそうは聞けなくて、寧ろ聞きたくなくて、聞こえない振りでチップスを頬張った。

華麗なステップで闊歩するガーター付きのおみ足を眺めながら、このバニーガールが“趣味”だと宣ったこれからの想像する。

……こわい。

やっ たっ て言っ てた。

やっ たっ て。

どっ ちもっ て言っ てた。

どっ ちもっ て、どっ ちうこっ こだ。

かつ、とハイヒールを履いた彼女が、一度だけ、あたしに振り向いて言った。

「あ、裏路地は入らないようにね」

ばたん、と閉められたドアを見送って。

「……くまさん」

「あ？」

「……もう、仕事仲間は勘弁してくれないかな」

ぬいぐるみじゃない生身の人間だと、妙にリアルに想像をしてしま
うから。

そこまでは言えずに、ただ、裏路地には入らないようにしようと、
チップスを飲み込んで、妙な気持ちになっ たあたしだった。

うさぎさんも一緒（後書き）

バーニガールの元ネタは自サイト短編『テラコッタバーニガール』。こちらに掲載するには少しばかりアダルティだったので置いてません。

気になってくださった方は、自サイト『楽観的木曜日の女』のShortTEXTカテゴリよりどうぞ^^

くまさんの謎

くまさんには謎がある。

くまさんはぬいぐるみ。

くまさんはくまさんであつて、やっていることはぬいぐるみらしくらぬこと……かどうか、実際は知らないけれど。

くまさんはぬいぐるみ。

くまさんは赤まみれ。

くまさんは、何者？

黒いボタンの目は、どこを見ているのかわからない。

茶色いモールの毛並みは、いつだって食べカスマみれ。

お仕事帰りのときは、得体の知れない赤にまみれている。

が、くまさんはぬいぐるみだ。

でっかくもなく、寧ろ、小脇に抱えるにはちょうどいいサイズ。

「くまさん、今日仕事は？」

「てめえは毎日、俺にひとごろししろってか」

そんなことは言っていないけれど、いろいろ聞きたいことがあります

た結果、口を突いた言葉がこれだった。

くまさんの謎（後書き）

このページも書き掛け放置中。
いつか書き切りたい。

オルゼウス歴499年12月、世界は500年に一度の大厄災に見舞われていた。

「迷信だと思っていたのに」

魔法術師エウレカは、そう呟き下唇を噛む。

乾いた唇からは、砂と血の味がした。

彼はまだ若く、魔法術師としても歴史学者としても未熟だった。

故に、古文書に遺された500年に一度の大厄災についても、強者であつた時の王オルゼウスが、そうしたためさせたに過ぎないのだと、通説を信じていた。

そうだと信じていたのは彼だけではない。

ほとんどの魔法術師が、歴史学者が、王族貴族が、国民が、この世界の全ての民が、そうだと信じていた。

ただ一人、彼の師匠である魔法術師ザーニイを除いて。

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ、エウレカ」

ぱんつと砂漠を叩いた彼の魔法錫の下に、一瞬にして魔法陣が広がる。

もう幾つ、こんなものを描いただろう。

もう幾つ、これが破られただろう。

エウレカは地道な作業を続ける自らの師匠に複雑な視線を向けた。それに気づいたザーニイは、ただ、肩を竦めるのみだ。

「出来ることを最大限にするのみだよ。我々には、彼女のような力はないのだからね」

「彼女……ですか」

エウレカは遙か先、しかし、すでに迫り来る大厄災に立ち向かわんとする一人の少女の後ろ姿を目に焼き付ける。

傍らには、常に寄り添っていた黒く気高き獣の代わりに、漆黒の髪に褐色の肌をした青年がいる。

少女は何を思っているだろうか、青年は何を思っているだろうか。

彼女が力を尽くさなければ、この世界は滅びるしかないと言う。

たった一人の命が、世界を救うのだと。

彼女の力は確かに桁違いだった。

押し寄せる大厄災を片っ端から斬って捨てる。

小さな体に似合わぬ長剣と、一丁の長銃を駆使して、砂漠を駆け抜ける。

その傍らでは褐色の青年が、漏れ出た厄災を魔法術と二刀流の剣で仕留めていた。

彼女は確かに桁違いだった。

だが、それでも人間であり、体力も力も無尽蔵ではない。

「……………」

青年が呼んだのは彼女の名前だったのだろうが、遠くて聞こえなかった。

しかし、この目が捉えた光景は、片腕を食い千切られた少女の姿。

「!？」

知らず息を呑んだのは、それだけが原因ではなく

「……500年前、真の世界の救世主は、オルゼウスではなかった」

ザーニイの静かな声が、エウレカの耳に響く。

「救世主とは贄　オルゼウスとは、贄の使い方に気づいた者の名だよ」

少女の腕を食い千切った厄災に、他の厄災が群がっていく。

それらはまるで魅入られたかのように厄災同士で共食いをし、そして、一気に崩れ落ちたかと思うと浄化され消えた。

その浄化にまた付近の厄災が巻き込まれ浄化される。

「彼女は　贄……生贄……？」

エウレカの声は震えていた。

A・1499-12（後書き）

データの中から発掘したもの。
仮タイトルです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0180z/>

妄想ウサギSIDE

2011年12月21日11時47分発行